
魔王の力で「この」世界を守れえええ??

イトマル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王の力で「この」世界を守れえええ??

【Nコード】

N5012Q

【作者名】

イトマル

【あらすじ】

人類の危機が迫ってるらしい

しかし、この俺がいる限りそんなことはさせない!!

と言うほどやる気まんまんじゃないで〜す。

敵を虐めるのは楽しいけどな

さてと人類背負って頑張りますか

注意 主人公は無敵です

プロローグ（前書き）

初投稿です気長によろしくお願いします
文、サブタイトル、修正しました

プロローグ

「ああだったらいいなー」

こうだったらいいなー

そうだったらいいなーとか

人間だったら誰でもそう思ったりするけど大体の奴は「思う」だけで「実行」はしないよな」

と、何やら偉そうなことをほざいている。そいつは俺こと坂上狭霧さかのうえさぎりである。

何故こんなどっかにいる教授みたいなことをほざいているかというと今自分自身が暇で暇で仕方なっから

である。また何故「暇」だからこんなことほざいたかという暇なのでいろいろ妄想している自分に気付き第三者の視点から、自分を見て言った感想だった。

「それ自分自身について物語ってるって分かってる？」

と野次を飛ばしてきやがったこいつは坂上神流さかのうえかなちなみんこいつは俺と双子の妹である。

「そんなもん自分が一番わかってるんだよだからこうしてダメ人間なのは俺一人じゃないと自分を慰めているだよ！」

「自分を慰めるんじゃないかって脱ダメ人間になるように努力しなさい！」

「だからお前は俺の母親か！」

何故自分のことをダメ人間といっているのかというと俺は運動も勉強もだくくっ嫌いだからだ。なんか文句あるか？に對しこいつは勉強、運動、人付き合い等々すべてが完璧でツラも10人中9人が振り返るんじゃないかと思うほど美人である（ちなみに髪型は常

時ポニーテールである）まさに容姿端麗、パーフェクトウーマンである。だからこいつが努力しろと言われてもムカツクだけである。

「そんなどうでもいいことはさておいて明日ちゃんと修学旅行に行くわよ」

そんなことって・・・まあいいやいつものことだこいつは

「俺がいつ修学旅行とやらに行かないといった？」

まあ奥義仮病を使ってサボる気まんまんだけどな、だってめんどいじゃん

「ばかさぎ（俺）のことだから仮病でもつつかてサボるつもりなんでしょ」

「・・・流石だな、よくわかったな褒めて使わすぞ」

「褒めないでいいからちゃんと来なさい」

「ふつやだねサボって俺は家でニートになるんだからな修学旅行なんかよりもっと楽しいからな」

そう言うってやると途端に悪魔みたいな笑顔をし、こういった。

「ほんとダメ人間の鏡ね、でも来ないっていうなら私の鉄拳とあとお母さんの財布からお金取ってプラモ

買ったのばらすわよ」

！！！！何故知っている！！罪悪感にかられながらも背に腹はかえれないとやってしまった悪行（あのあとちゃんと返しましたけど）しかも何故プラモを買ったことも知っているんだ？こいつはストーカーなんかか？

「たまたま見たからついて行ったんだ、ストーカーじゃないわよ」
なんでこいつは俺の心を読めるんだ・・・

「・・・分かったよ！！行きゃあいいんだろ！！この野郎！！」

「・・・この野郎？誰に向かって言ってるのかしら？狭霧君？」
くそっ！！こいつ絶対Sだ！！

「・・・行きゃあいいんだろ神流」

「はっ？」

「・・・行きますよ神流さん」

「はいっ？」

「行かせていただきます神流様！」

「ふむそれでよろしい」

・・・泣きたいぜこんちくしょう・・・ああ俺のニート生活が・・・

そして落ち込んだ奴1名と勝利に満ちた満面の笑顔で綺麗な奴1名が帰路をついたのであった，，，

そしてこの半強制的に行く（脅されて）修学旅行で狭霧は脱ダメ人間になってしまったのであった，，，？

プロローグ（後書き）

感想をお願いします
訂正しました

まだプロローグ（前書き）

文、サブタイトル、修正しました

まだプロローグ

目の前に神社が建っていた

別にただのどうでもいい神社ならなんともおもわずさっさと中に入るだろうしかしこの神社には入りにくかった

何故??

なぜならこの神社、別に神社オタクでもない俺でも見た瞬間分かったよ

こんな神社は存在しない

神社についてよくわからんがこんな柱、床、屋根、壁、扉、等々全てが暗黒色にそめられているからである君はこんな神社知ってるかい？ しかも＋αこの建物は無言ではあるが他者を寄せ付けさせないもの凄い威圧感がある、

「なんだよまったく、よりにもよってこんなラスボスでもいそうない神社がこんなところにあるんだよ、でも状況が状況だしな．．．かといって他の建物は全く見つからんしこのままだところへ死にそうだしな．．．」

何故他の建物が見つからないのかは置いて状況を説明しよう

季節は冬（２月）、鎌倉にいる、そしてなんと ゲリラ豪雨が降り注いでいるのである

降水量がかかるく500m？はこえてるんじゃないかと思うほどだ、なんといっても一滴一滴がスーパーボール並の大きさ、しかも季節が季節なのでわかりであると思うが痛寒いたさむなのである。前を見るのも一苦労で手で目の上を押さえながら見ないと目が痛い

（なんでこうなったんだっか．．．．．）

そう思いながら今までのいきさつを回想するのであった

．．．．．
．．．．．
．．．．．
．．．．．
．．．．．
．．．．．

今、坂上狭霧はバスの中で永眠した。．．．．．the end.

というのは嘘びよんで単に気絶しているだけです！まだ終わりません！

まあバスの中で気絶しているのはそれはそれで不思議なことである。なぜ気絶しているかということの発端は朝のことである。．．．朝、昨日悪女に脅されたため仕方がなくニート生活を放棄し今日行

く準備をし寝て、朝起きようとするすると睡魔が脳を覚醒しようとしていることに妨害工作を実行したため2度寝してしまった。すると昨日の悪女がそろそろ行こうと思ったら俺がまだ寝ている事にキレ、俺の腹に怒りの鉄拳で制裁やがり、悶絶している俺を無理矢理起こし俺のほっぺたを往復ビンタで追い討ちをいたがった。

そのことをツレに同情してもらうために話そうとすると（バスの中）後の席から殺気を察知し恐る恐る後を見るとなんと後の席には悪女（坂上神流）が極上の笑顔でこちらを見ていた・・・そこから記憶は無い。後でツレに聞いたことによると、神流が残像が見えるほどの速さで右ストレートを繰り出し俺の顎を殴りつけたらしい。そのまま目的地につくまでの4時間気絶していた。

「それはお前が悪いだろう神流様に感謝しろよ」

と俺に話しかけてきたこいつは近見 涼というさっき言ったツレだ気絶から覚めてからホテルにつき、部屋割のためなんとかあの暴力女から逃げる事ができた。そのあと何故殴られたのか聞いてきたので朝での出来事を話してやったらこう言ってきた。

「なに様付けしてんだよ気持ち悪いんだよ、つうか前から思ってたんだけどうちの学校の生徒みんなその呼び方だよな」

「当たり前だろあの方は男女とわずみんなに愛されてんだからよ」

「だったらなんでおれのことには狭霧様って言わないんだよ」

こう思ったのは俺はアイツの双子だからだ

「その理由は簡単だ双子なのにおまえは劣等種だからdぐはっ!!」

むかついたので踵落としをこいつの腐った頭にしてやった、神流は女なので反撃できないが男なら暴力OK!!

「そういうことは言われるとむかつくだよねゝ劣等種？ふゝんそゝかゝ、あっ!! やばい劣等種だから神経がおかしいのかもなあゝ手が勝手に動くゝあゝ足も勝手にゝ」

「ちよっ! やめ「無理」ゲフツ! 助け「やだ」ゴフツ! すみませ」
「許さん」ブハツ!

この出来事は10秒間の内の出来事である

昔にも同じようなことを言われ全治3週間の重傷を負わせてやった奴がいる(まあ嫌いな奴だったので罪悪感は無だ)。言ってなかったが俺と神流は現在進行形で空手と合気道と柔道を習っている。

親がいうには暇なんだからやりなさいと5歳からやっている。またまた言ってなかったが俺達は中学2年生である遅れてすまん。あれ俺誰にいつてんだ?

やりすぎだといわれるかもしれないがそこは安心! なぜなら・

「そんなことより狭霧、確かこれから神社巡りだから行こうぜ」

とまあこいつの回復力は尋常じゃない、というかキモい、殴っても蹴っても2秒で立ち直るという奇人ぶり、だからやりすぎでもなんでもない。ちなみにアザなんかできなくこいつ本当に人間なのかと暴力を振るった後いつも思う。

「俺がいうのもおかしいが、お前ホント丈夫だな」

「ああそれだけがとりえだからな、お前の攻撃など痛くも痒くもないねはっ、はっ、はっ」

「まあ・・・いいか、じゃあ行くか」

この神社巡りが俺の人生を540。変えちまうなんて夢にも思わなかったぜ

まだプロローグ（後書き）

感想をお願いします

まだまだプロログ（前書き）

プロログが長くてすみません。
サブタイトル、修正しました

まだまだプロローグ

ハッキリイオウ

俺にとって神社などこの広大なる宇宙のなか中で失恋でもして自暴自棄になり自殺してしまうくらいドウデモイイ存在である。

（罰当たり？ 知るかそんなもん、やれるもんならやってみろ）

という心情なので神社巡りなんてもんををやるとなると鬱鬱まっさかりである。（しかし抜け出そうにも神流に殴られるしなあ）

「ハア〜」

ちなみに今回の神社巡りとやは反班行動らしい（らしいというのは寝てたため聞いていなかったからである）
メンバーを紹介すると

神流

俺

涼

聖子（神流の親友だそうだ）

聖子についてだがまあ美人なんだが…

「やあサッギツー！！今日もイケメンだね〜ご褒美にチューしてあげ「やめろ」え〜なんですよ〜」

とまあウザイプラス変態という奴なのである。

このあと神流がお袋並にうるさかった（聖子とどうたらこおうたら）あと涼もなんか言ってたが覚ええない。

十分後ようやく出発し（なげーよ）、お寺や神社等ををグルグルまわっていた。

勿論気分はローテーション

（早く帰ってえ〜）

そんなローテーションオーラを撒き散らしながら道路を歩いている俺の前に突然見知らぬ少年がたち塞がった。

しかもなぜか俺のことをじい〜と見つめてくる

「…」

「?」

何度みても真正銘名前も知らない（身長からみて多分そうだろう）
小学生である

ちなみに今の俺の立ち位置班の中で最後尾にいる

「どうした坊主、親からはぐれちゃったのか？だったら俺じゃなく
てあのハゲのおっさんに聞いてくれ、ハゲなりに教えてくれるはず
だ」

店のおっちゃんに指差してと言ってやっても

「……」

という沈黙

どうしたものかと考え、しょうがないので神流を呼ぼうとしたとき
いきなり俺の足に激痛が走った

「いってえー!!」

とあまりの痛さに足を抑えた。何故痛かったかという、いきなり
前のガキが俺の足を踏んだからである、

「っ、てめえ〜!」

と、言うと

にかくく

と満面の笑顔でしてやったとばかりに笑っていやがった

これにキレた俺は

掴まえてから尻でもひっ叩いてやろうとすると

さささー

走って逃げやがった

「こら待てガキい」

勿論金魚の糞のごとく追跡した

すると道を右に曲がったので俺も追跡のため右に曲がった。

しかし、曲がった瞬間俺は息をするのを忘れたほど驚愕した

「はっ・・・？」

思わず馬鹿みたいになってしまったが、仕方ないだろうなんせ

普通は、いや、絶対あるはずである人工物がなにひとつないのである。

つまり建物、道路、電柱等がひとつもないのだ
勿論一人もいなかった

「あれゝおかしいなあゝあゝそうかゝ足踏まれた痛みで頭の神経がいかれたんだな、うん、そうにちがいない」
わけ分らないを言って目の前の状況を信じない俺である。

「そうだ、戻ろう」

と今の状況から戻る為、後ろを見ると

「…嘘だろ…」

前の景色と同じになってしまっていた

「おいおい！洒落にならねーぞ！誰の苛めだこんちくしょう！」

しかしこの文句に答える者は誰一人いなかった…

（そーいやあのガキどこいったんだ？…何か知っているかもしれない、てゆうか絶対しってるだろ！アイツのせいでこんなところにきちまったんだからな、締め上げて聞き出してやる！）

という目的のためあの謎のガキを探すことにした俺は歩き出した

するといきなり！

「んっ？どおあっ！！」

雨が降った

それもまあ、超特大超大量の雨だった

「ふざけんなー！ー！くそつまんねえ神社巡りなんかやらされてたら知らねえガキがからかってきたから追いかけて右向け右したら何もねえだれもいねえとこにきたと思ったら雨が降ってくるのかなのいじめだこんちくしょう！！！！」

と、天に向かって吠えた

しかし、もっともな怒りなのだが怒りの矛先がないのでみじめなだけだった

しかし、雨のせえで目が痛くなったので下を向いた。そして本当に何となく何となく前を向いた。すると、そこに

異様な神社がたたずんでいた

……

…

回想終了

そして俺はこの謎の神社内に入っていた。

まだまだプロローグ（後書き）

感想よろしくお願いします

魔王からの使命（前書き）

今回ちょっと長めです！ やっとプロローグが終わりました

魔王からの使命

中に入ると完全な暗黒空間で、神社なのに何故か天井や壁に取り付けてある電球の灯火が夜空の星のように輝いていて神秘的になっていた

(…どうしようか)

外に出ようにも、どうせなにもないし、特大級の雨が俺を待ち受けてるだけだ

しかし、実はあることに気づいていた。

こんな場所に人が来ることなど皆無はずなのに何故か賽銭箱があり、しかもその中からどうも誰かを呼んでいる声がきこえるのである

「おーいサギリくーん無視しないでこっち来てよーおーい」

うむ、今日はいろいろあったから疲れてるんだな、あっ！もしくは雨でずぶ濡れちまったから風邪になってそれが頭痛にきて幻聴が聴こえてんだな、うん、そうに違いない、絶対そうだ

「そんなかたくなに我の存在を「あー早くや雨まないかなー」…」

「今日晩御飯何かなー、家に帰りてえなー」

俺は外を見つめ独り言を続けた

「…仕方ないそんなに無視するならばこちらにも考えがあるぞ」

と言うと、いきなりガタン！という音がなり、すると突然俺の背後から殺気が迫りとっさに振り向くと、

刹那

俺の唇を奪った

一応女と付き合ったことはあるが、どう接してやればいいのか分からず結局相手を怒らせてしまい、一週間で別れた（これがトラウマになった）為キスなんかできるはずなかった。

閑話休題

…はっ？

いや待て！今の状況をどうにかしなければ！

「んんん！んんん！、んんんん！」

しかし、こいつが手で俺の顔を両手で抑えて離さなくなかなか離れられなかった、しかも女の象徴である2つのブツが俺の胸付近に密着して、俺は放心状態になってしまった。もうどこにかなりそく
だあ

そして、十秒ほどそうしていた

（はっ！いかん！理性を保て俺！見知らぬ女性にキスされてるのは
なんかこう色々な意味で駄目だ！）

と、どうにか自分を立ち直らせ必死の抵抗をみせると以外にすんなり解放した

「っ、はあゝ、はあゝ、はあゝ、っつ、何すんだよ！」

つい息を止めていたため、息をあわせる為の時間を浪してしまった
がなんとか問いかけることができた

「だってお主が我を無視し続けるから仕方なく無理矢理だが「契約」
させてもらった」

「…」

しかしよく見るとこの女は絶世の美女であった。髪型は長髪でスト
レート、端正にに整った鼻と口、大きいくりくりした可愛い目、し
かも何故か巫女服装である。十人中十人は振り向くんじやないだろ

うかね

閑話休題

「契約ってなんだ」

ていゆうかキスをするやり方の契約ってなんだよ、そういやキスして契約する魔法系のアニメがやってたな…魔法？

「そうじゃ魔法で契約儀式をおこなったのじゃ」

俺の考えを読みやがった

「てゆうかマジですか…魔法で」

「ほう、お主のことだからバカ言うなとかいって信じないと思ったのだが」

「…まあ今日は色々あったしなんというか信じちゃうしかない状況なんだよそんなことよりてゆうか質問にこT…」

「我が名はサタンつまり魔王じゃ、ある理由で、お主に我の力で世界を守ってもらうことが契約内容じゃ」

…なんか今すごいをさらりといわなかったか？魔王？世界を守る？俺が？

そして、俺の最初の質問はこうだった

「なんで魔王が巫女の服装なんだよ」

「神社といえは巫女だと思ったんじゃないのか？」

「…まあいい、てゆうか俺が世界を守るってなんのことだよ！」

「そのことの前に理由について話す。実はな、四年後にこの惑星と異世界のこの惑星が理由はわからんのが融合してしまうのじゃ」「融合？」そうじゃ詳しくいうと、この惑星に異世界のこの惑星が惑星ごとくつついてしまうのじゃ、つまりあっちの惑星の地表、物体、生物がこの惑星に入り来んでしまうのじゃ」

（地表も入りこむってことは、多分地球は丸なくなっちゃうってことかよ！マゼランさんドンマイ！）

「そしてここからが一番の問題なのじゃ。あちらの惑星の生物、それは魔物なのじゃ、漫画などに出ているような奴らじゃ、実は今現在にもその魔物がこの惑星に時々侵入しているのじゃ」

「！！それってまずいんじゃない！！」

「ふっふっふ我を誰だとおもっている！神世界実力ナンバーワンの魔王じゃぞ！」

「…あの～お話中すみませんが一つ質問してもよろしいですか？」

「うむ、いいぞ」

「魔王って普通神と相対する存在で魔物を下僕にしてるんじゃないのか？」

「それは人間が勝手に決めたことじゃ！魔王というのは神界での官職じゃ！魔物などを操る悪役なのでは断じてない！そもそも地球を作ったのは我じゃぞ！」

「マジですか！？」

「そうじゃ！なのに創造主のことを悪役呼ばわりするなんて、なんて親不孝者どもなんだ！！」
地球の母と知ると俺は

「す、すみません！」

臆病者化した

「：まあこの話はもういい話を戻すぞ」

「は、はい」

「魔物には軍事兵器など全然きかぬ、なので我が魔法使いというのを造った「マジですか？」ああ、あと魔物が出てくる場所は一定の場所であることが分かりその場所に魔法使いが多数いる学校を建てて、魔物が出てきたらすぐに消滅させるようにしているため今のところは大丈夫なのじゃ」

「なんで学校何ですか？」

「実は魔物が出てきたのは最近で、我も赤ん坊からでしか魔法使い

を造れなかったのでしたか？

「赤ん坊の頃から魔法が使えるんですか！？」

「いや、それはない。使うには誰かに教えてもらわなくてはならん」

「え、でも…」

「そうじゃ、教える奴がおらん。だから我がそこらへんにいるつかえそうな暇人を集めて、魔法を使えるようにしてからそいつらで魔法連合をつくってそいつらから教わるようにさせているのじゃ。しかし、無理矢理魔法使いにするのは特例なのだったのでこれからはもうできんのじゃ」

「なんか出来ることと出来ないことがよくわかりませをね」

「神のルールはよくわからんことが多いじゃ」

「あれ、てゆうか魔法使いは普通には産まれないんですか？
たしか、造ったっていったよな」

「いや、二十年前から少数だが性行為で産まれるようにしている。
まあ魔法使いが見てやらないとただの人だな。」

「ちなみに魔物って獰猛なんですか？」

「獰猛なやつもいるし、おとなしい奴もいるぞ、まあこの世界に今来るのは全部獰猛じゃがな」

俺はあることにきずいた

「魔法使いがいるんだから別に問題ないだろう」

「そうなんじゃが最近の魔物は強くなってきたの、ちとアヤツラじやキツくなってきたんじゃ」

「ふうん、それで俺に融合を阻止せよう、という訳か」

「そうじゃ」

「だが断る！」

そんな面倒なことやってられるか！！

「ふっ残念だったな、もう契約してしまったぞ？」

…そうだった

「といゆうかいまお主がやらなければ、確実に世界は滅びてしまうんじゃ、だから頼む」

といって頭を下げた

「…分かりましたよやればいいんでしょやれば」

「すまない、頼む」

「ちなみに俺がもらった力ってなんですか？」

「創造を現実具現化する力と魔力無限じゃ」

チートかよ！ヤバすぎだろそれ！

「ちなみに自分以外の生物には創造を具現化することはできん」

…つまりあいてに無理矢理消えろと思っても消えないってことか

「魔法については魔法連合の奴等に教えてもらえばいい」

「わかった」

「…では頼むぞこの世界を守ってくれ」

「了く解」

…あれ？でも俺どう帰ればいいんだ？

帰るかたを聞こうとしたとき

突然俺の視界が

ブラックアウトした

魔王からの使命（後書き）

感想をお願いします

狭霧の足を踏みつけたガキは魔王のしかけです、書ける場所がなくここに書きましたすみません

吸血鬼&チートなロボット

視界が真っ黒けになったと思ったら、俺は何故か仰向けになっていた。

しかしまだ視界が暗黒のままだった、硬い床が俺の背中にキスしていたため、仰向けであることが分かった。

(…何処だ此処は?)

そう思い、自分の居場所を確かめる為に立ち上がろうとしたが、頭を少し上げた途端に何かが前頭部にぶつかった

(何だ?)

確かめるべく手で触ってみたところ板のような素材でできたものだった。

更に確認の為に前後左右を触ってみたところ俺の体にあわせて造られたような構造で、ほんの少ししか動けない程狭い空間であった。

(何処だよ此処は!?)

これは本格的にヤバイと思い始めた時

(おゝい聞こえておるか)

「うおあ!」

(…そんな驚かんでもいいじゃろ)

「当たり前だろうが! いきなり呼ぶな! いや、そんなことよりあんた何処にいるんだよ!」

（我はそこにはいんど、念話というのでお主に話しかけておるんじや）

「なるほど、魔法か」

（そうじゃ、声を出さんでも考えたことが相手に伝わるんじや）

「…そんなことよりここ何処だよ！」

（うむ、実はお主死んだんじや）

…はっ？

（お主が我の力を手に入れた反動で死んだのじや）

「じゃあ此処は何処だ、地獄か？こんな地獄聞いたことないぞ、俺を閉所恐怖症にする地獄なのか？」

（そんなわけなからう、我がお主を生き返らせて棺桶に入れておいたんじや）

「何故棺桶？」

（そんなことより外に出たらどうじゃ）

「ああ、そうだな」

棺桶なので上に押せば開くと思ったが…開かない、というかびくともしない

「おい、これ何キロあんだ？」

(約1tじゃ)

「あほかあゝゝ!! どんなどこに入れてんだよ! 出れねえじゃねえ
かよ!!」

(うるさいのおゝ何の為にお主に力を授けたんじゃ?)

「あつ、そうだった忘れてた、：じゃあ早速やってみるわ」

ーーーーー創造具現化

ーーーーー手榴弾

「おお! ほんとにでてきた!」

(それをどうすr「ピン!」(手榴弾の安全ピンを外す音)はっ
?)

「勿論 爆破する!!!!!!」

(お主はバカかあゝゝ!!)

ドツカアーーーーーン!!!!

「よし！脱出完了！」

棺桶から出、煙がたちこもる中から出てきた俺が言った

（…お主の発想はわけ分からん）

「そーいや至近距離から直撃したのに何で俺いきてんだ？」

（やったあとにそれを質問するのか！…まあいい、実はお主、今不老不死なんじゃ）

「マジですか！」

（ああ、生き返らせた時についでにな）

「ん？待てよ、不老不死、棺桶…ってまさか」

（ついでに吸血鬼になってしまったんじゃ）

「って、人外じゃね、それ」

（不老不死になるには仕方なかったんじゃ）

…まさか化物になるとはな

「ちなみに吸血鬼特有の弱点は・・・」

（ない、というかあれは迷信じゃ）

ほっ、よかった、昼間外に出られなくなると思ったぜ

（まあ吸血鬼になっても、たいしてなにも変わらん、不老不死だけだな）

…他に何かついてほしかなかったがな

「血も吸わんでいいのか」

（一応吸えるが別に吸う必要はない）

…本当に吸血鬼か？

（おっと、忘れてた。お主に使い魔をつけようと思ってたんじやった）

「おお、くれるのか」

（いや、お主の創造物に、この世界の言語、歴史、建物の知識を入

れようと思うのじゃ)

「知識だけかよ、というか何故？」

(お主そういうの知らんじゃろ?)

「まあな、でそいつに教われと」

(ああ)

「…まあいいか、力使えばすぐ覚えれるだろ」

(じゃあ早速造るんじゃ)

「何でもいいのか？」

(別に何でもいいぞ、お主が造ったものなら後で変えたり、改良したり自由自在じゃ)

「うゝむ何にする？」

使い魔か、今の状況的にやっぱりあれかな

「ガノノイド型ロボットだな」

吸血鬼ときたら、やっぱりこう来るだろ。

――創造具現化

――ガノノイド型ロボット

ばぁーと少し光り、そこから創造どうりの人物が現れた

「おおーいいねー」

容姿は完全に茶々丸だ

ちなみに能力についてもいろいろ創造した。

まず、肉体の全てが、核爆弾の直撃をしても傷1つ付かない人口皮膚にしている。

ぜんまいではなく完全に俺の魔力配給にしている（魔法の使い方が何となくわかったから）

もちAIだがスーパーコンピューター100000個分の頭脳にしている。

更に肉体の筋力を上げた。腕力はゴリラ1兆体分、脚力は馬1兆体分、これにより運動神経、反射神経が人間の100兆倍くらいになった。（マツチョじゃないぞ！）

武装

目…一億℃のビームが出る。千キロ先まで望遠可能

口…睡眠、毒、麻痺ガス、の放出可能

耳…センサー機能（半径千キロまでセンサー可能）、一キロ先の会話も聴こえる聴力

腕…関節部から、刃先が分子レベルの刃が突出する（何でも斬れるぜ！）

両手…手の平から魔弾（一発で家を半壊可能）を連射できる（毎分

千発くらい)。チャージショット可能

脚：ブースターが付いており魔力で飛行可能（マッハ一万ぐらいの速度）

足：魔力無効化のキックができる

変身機能何かもついている。やっぱりチート性能じゃないとね

ちなみに俺が創造している時に魔王が知識をいれたらしい

（どうせだから魔法の使い方も一緒入れといた。ちゃんと教われよ。では用はすんだから念話を切るぞ）

「ああ」

というと静かになった

「さて、お前の名前を決めるか」

本家が茶々丸だから：

茶々王！

「よし！お前の名は茶々王だ」

ネームセンス？なにそれおいしいの？

「かしこまりました、マスター」

ちなみに性格も茶々丸だ

「…では最初に聞きたいんだが此処はどこだ？」

魔王に聞きそびれた俺であった

吸血鬼& a m p;チートなロボット(後書き)

感想お願いします

拠点見つけたり

茶々王が言うに此処は日本国内（東京）で昔使われていた地下施設なんだと

「日本にこんな場所があったとはな」

「日本政府が秘密利に人体実験を行っていた研究所だったのですが、東京大空襲時に上階からの通路が爆破され、位置が特定不能になり行方不明になっていました」

「…よく知ってるな」

「魔王様にいただいたものですから」

どうやら魔王の存在も知識内に入っていたようだ

「じゃあ此処を拠点にでもするか、もう俺は人外だし、いまいち人間に会わない方がいいような気がするしな」

ということで内装を整えることにしたが、この元研究所の内装は不気味なものばかりだったので、手のひらサイズの小型ブラックホールを創造し、全部吸ってもらうことにした。そうしていて分かったのだが、この元研究所、結構部屋が多い、10部屋程あった。しかも一つ一つが大きい

「これは部屋作りの遣り甲斐があるぜ」

と、やる気満々だったのだが、キッチンとリビングを装飾したら面

倒になったので俺と茶々王の部屋をやったら、他の部屋は保留することにした。

まず茶々王の部屋から装飾するか。

「茶々、必要なものをこの紙に書いて、俺に渡してくれ」

と言い、紙とペンを創造して茶々王に渡した
ほんとこの力使えるわ

「了解しました。マスター」

と言いいリビングに行ったので俺も自分の部屋を装飾しに行くことにした。

「さてどうするか」

というのも、必要最低限の物しかないかなと思いい、ベッド、机、棚しか置かなかった為何と言うか、自分の部屋が殺風景だからだ。

「そうだ、能力の練習してえからそのための異空間造ってそこに繋がるドアでもつけるか」

危なっかしい兵器の創造とかできるしな

異空間ドアを造るべく壁に手をつけ創造した

――創造具現化

――異空間&ドア

一瞬で出てきた人工物は縦1.8メートル、横1メートルのドアだ

勿論だがただの異空間ではない

- ・空間内にいる時、元の世界での1分間が24時間に変わる。

- ・広さは無限大

- ・色々なエリアがある

- ・動物園がある

最後のは異空間のある一角に結界で囲んだ、巨大な熱帯森林を作り、
その中に俺が創造した現実にはいない動物（約二百種類）を一万体
召喚した所だ。詳しい説明は後程。ちなみに動物園なので外から観
察できる

今、分かったんだが、俺が創造具現化してるとき時間が止まるらしい

作り終えた後、他の内装はどうしようか悩んでいる時、紙を持った
茶々王が来た

「おう、決まったか」

「はい」

早速茶々王の部屋へ行った

「じゃあ紙を見せてくれ」

「はい、どうぞ」

受け取って見るとやはりというか必要最低限のものしかなかった（俺と似たような感じの）

早速内装作業に取り組むことにし、色、設置場所を指示してもらいさっさと終わらせた

「一応風呂を造っとくから、いつでも勝手に入っていidez」

女は風呂が好きとかいう話を聞いたことがあるからだ

「ありがとうございます、マスター」

「あと早速で悪いんだが、茶々の知識を俺にコピーさせてくれ」

魔王は教われとか言ってるがこの方が百倍早い、魔王あんたの考えはふるいんだよ

「了解しました」

と言い、手を出してきたので多分触れば知識を注入するのだろうと分かり、俺も手を出し重ねるといきなり、

俺の頭に激痛が走った

「!!ぐうあつゝ!!!!いってえゝ!!!!!!」

茶々が何か言っているがまったく聞こえず、叫び続けた。すると突然俺の意識が遠のき、そのまま俺は床に倒れふした

「うゝん!」

起きたとき俺は茶々王によって俺の自室ベッドで寝かされていた

「すみません！マスター、私がしっかりしていれば！」

横で茶々王が頭をペコペコ下げて俺に謝っていた、何故倒れたかというと、大量の情報を一気に入手したため脳が耐えられずオーバーヒートしたからである（まあ一応入ったみたいだが）。てゆうかあの、全力で謝るのはいいんですけど速すぎて残像しか見えないんですけど…

「そんな謝らんでいい、不注意だった俺が悪い、というかちよっと寝ていいか？まだ頭が痛い」

「すみません！分かりました、おやすみなさいませマスター」

「ああ、おやすみ」

終始頭を音速の速さで下げ続ける茶々王であった。

俺は脳が睡眠を高速で要求してきたので、すぐに眠りについた

翌朝？いやはっきりいって今何時何分なのかも全然分からん。冬眠をなくなく実行させられて、体内時計を目覚ましがわりにしている

蛇の気持ちがわかるぜ

閑話休題

まあ頭痛も引き、清々しい朝？を迎えたんだが何故か息苦しい、
なので、起きたらまた残像が見える頭下げ下げを実行している茶々
王を止めさせ、理由を聞いた

「今は空間内の酸素量が少ない為呼吸がしにくいのだと思います」

そういえばここ完全な密閉空間だったね
なのでさっさと創造し、二酸化炭素を酸素に変化させる空気洗浄機
を造った

造った後さつき気になったことを茶々王に聞くことにした

「今が何年何月何日で何時何分か分かるか？」

「2007年1月12日午後6時10分です」

…俺が鎌倉行った時から二年もたってんのかよ
たしか今の魔法使いだと、きつくなってきたんじゃないか。つ
てか朝じゃないね、どうでもいいけど
とか考えてると

（おい、狭霧）

「ん、ああ魔王かどうした」

（実はな、お主が生き返るまで何とか頑張っていた魔法使いどもな

んだが、今回の魔物はやたら強くての、加勢に行って貰えんかの
やっぱりか

「了解だ、で場所はどこだ？てゆうか複数あるのか」
（いや今のところ、強い魔物が出てくるのは私立夜行月中学校だけ
じゃ）

「つまりそこに行けと」

（そうじゃ）

「了解」

（うむ、頼むぞ）

ちょうど戦闘練習したかったからな。いっちょやるか

「茶々、悪魔退治の為に夜行月中学までいくぞ」（知識内にこの中
学のことがあった）

「了解です、マスター」

と、行く前に俺自身を強化しねーと。

えーとまずは肉体力を茶々王の二倍にするのと全能の眼にすると、
ん？全能の眼ってなんだ？自分望んだものが見えるだけだ、例えば
一万キロ離れた先の物を見るとか、時計の中身を見るとかそんな感
じだ。

一応、魔法の使い方はOKだ。まああんま使うつもりないけど、武
器強化にしか使わん。

よし準備オーケー

「行くか」

早速行く為に地上へワープする魔法を使おうとしたとき思い付いた

「そうだ！どこ〇でもドアで行くか」

21世紀の発明道具って全部チートだよな。俺も使いたかったんだよ。まあ今は俺の存在がチートだな

「了解です」

茶々の了承も得たし早速！

――創造具現化

――どこでもドア

やべ！全部書いちゃった！↑作者

ん？なんか変な声が聞こえたがまあいいや

「そんじゃ行きますか！」

俺は勢い良くドアを開けた

行き先 夜行月中学

拠点見つけたり（後書き）

時々狭霧が茶々と呼んでますが、別に文字入れ忘れではありません。
愛称です

俺 i n 戦闘域

勢いよくドアを開けた先は学校の校門前だった

早速侵入しよう時あることにきずいた

「ん？結界が張られてんのか」

認識阻害の結界が張られてたが、俺の全能の眼には丸見えだぜ！

「早速中に入るか」

ちなみにこの夜行月高校は、外見ではめっちゃくちやでかい。なのに何故俺がなんの反応を示さないかというところ魔王さんからもらった知識内に何故か入っていたからだ。まあといっても外見、内部構造と歴史しか知らない。

「茶々、魔物の位置を教えてくれ」

「校庭と裏庭と体育館です。マスター」

流石茶々王把握済みか

「了々解」

（さくでどう調理してやろうかね）

魔物を見たことすらないのに自信たっぷりの狭霧であった

そして

幸か不幸か彼の到着を二年間待ち続けた少女がいた。

（時音 side）

なんなのよ！もおー！！

最近の魔物強すぎー！

なのに増援はまだ来ないし！院長は来る来る言うだけだし！2年も待ってんのよ！いい加減来なさいよ！

内心怒号を飛ばしつつも相手と立ち会っている

「早くあんたは消えなさい！」

渾身の力で相手に斬りかかった

今時音は全身が甲羅でおおわれて、顔だけドラゴンの魔物を相手にしている。愛刀の鮫肌で頭部を斬り落とそうとしているが、両手の甲羅で阻止されるということを繰り返している。

「オマエ程度デ俺ニカテルカ！」

「くっ！」

ガードした刀身を素手で掴まれ、そのまま時音ごと横に投げ飛ばさ

れた。

（くそ！また強くなってきてるじゃない、刹那と健介もそろそろやばいみたいだし、てゆうかこいつどんだけ堅いのよ！素手で掴むとかなり得ないでしょ！）

三体一の状況で勝てない自分達が不甲斐なく感じていた矢先

「ソロソロ終わりニスルゾ！！」

遂に化物の終了宣言だあゝゝゝ

手足と頭を体内にすっこませ高速回転するリアルカメラが突っ込んできた。

「くっ！焰の柱！」

前方に魔法陣を召喚しそこから直径3メートルの火柱が立ちリアルカメラを迎え討った。この最悪の魔窟で「消去者」に就いているだけあり中級魔法をOne単語で実行するのは流石である。だか、

「ムダムダムダー！！」

顔が引っ込んでいる筈なのに何故話せるのかは不明だが、言葉どうり高速回転で炎を弾いている

「くそ！」

刹那と健介も私の横に立ち同じ焰の柱を放ち威力は三倍になったのだがそれでも相手の勢いは止まらず三人に徐々に近付いていったすると10秒後に刹那が魔力が尽き初めたのか膝を付いた、同時に健介も膝を付けた。

(これはちょっとヤバイかもね…)

この三人の中で一番魔力保有量が多い時音でさえも体が震える程きつくなってきた。

「コレデThe endだ!!」

何故か英語を放ち、弱弱になった焰の柱×3を高速回転で相殺し突っ込んできた。

「くっ!!」

魔法を中断し防御に徹することにし障壁を張った。

しかしまた相手の攻撃は時音の魔法を上回り障壁をぶち壊した。

(ここまでか…)

今までいくつも死を覚悟することがあったが何とか生きていた、だが今回ののは最悪らしい

自分の最後まで相手を睨み付けていた。すると時音の前に突然人らしきものが立ち塞がった。

「何がジエンドだ化物のくせに生意気なんだよ!」

そしてリアルガメラの高速スピンを止めた

しかも素手でだ

そのことに私は眼を見開いたのだが

「バ、バカナ!!」

どうやら相手も驚愕に満ちているようだ。それはそうだろう、身長2メートル以上ある自身の必殺技を素手で止められたのであるから。

「うらあっ!!」

前の少年がリアルガメラを前方に投げ出した

「のおああああ〜」

丸まったまま校庭の真ん中まで吹っ飛んでいった

すると少年が突然軍隊が使っているようなロケットをもち、私が何か言う前に発射。そして白い尾を引きながら相手に直撃した。しかし魔物に軍事兵器が効くはずもなく掠り傷ひとつ無かった。

「あなた! そんなのは効かん」分かってる」だったら::」

しかしまたこの少年は同じロケットを何処からか持ち出した。

「だからそれは::!!」

止めさせようとしたがいきなり膨大な量の魔力がロケットに高速で集約されていることに気付いた

(なんて魔力なの!?)

既に私の魔力保有量を超えた魔力が注入されていた。そしてその口

ケットが発射された。

先程は違い弾速が桁違いに違い一瞬で相手に到達し直撃した。

ドウガアアアアアーーーーーン！！！！

…完全に呆気にとられた、直撃したリアルカメラはこっぴ微塵になり、しかもそこから半径約70メートルのクレーターができあがっていた。たった一発で校庭の半分が吹き飛んだのである。

「やべ、やりすぎた」

自責の念に駆られていた少年だった

「あなたは、一体…？」

「質問は後だ、あいつらを消してからにしてくれ」

という一瞬で消えた

〈狭霧side〉

いや、本当にびっくりした。いま堅そうな魔物と戦っている二人の女がネ○まに出てる明日菜と刹那に激似だったからである。男は知らん。

「茶々王、俺は校庭と体育館のを殺るから裏庭のを頼む。」

「了解マスター」

と言って一瞬で消えた

「おっ、もうピンチか」

明日菜似の障壁が破壊されていた。普通この時点で手遅れなのだが、今の俺は普通？なにそれ美味しいの？だからな。

脚力が馬の2兆倍の脚で一瞬でリアルガメラ化している魔物の前に立ち塞がり、受け止めた、痛くも痒くもないね。The endとか生意気な事をいっており英語が全く出来ない俺はこれにキレた

「何がジエンドだ化物のくせに生意気なんだよ！」

そのまま前に投げ飛ばしたそして、武器を創造した

RPGー7

こいつ一発で戦車が破壊できるロケットランチャーだ。一回素のままで撃ってみた
ー効果無し

明日葉似が効かないとか言ってから分かったとだけいった

次のは違うぜ？

同じRPGー7を出し、魔力を限界まで注入して、
発射！！

やりすぎた、思った以上の威力だった。まっいっか。
気にしない気にしない

校庭の半分が消えたなんて気にしない

「あなたは一体…？」

おっと体育館行かね〜と

「質問は後だ、あいつらを消したらにしてくれ」

体育館内に転移した。

今回はちゃっちゃと終わらせることにした

「創造ーライトセイバー」

架空の武器で瞬殺することにした。敵は人の頭をした蠅だった。キモッ！対する地球防衛魔法軍団は全員教師のようだ。（やる気ダウン）魔法を連射して消そうとしてるが意外と人面蠅は速くて当たらないようだ。

まあ俺にはNo problem！

跳躍で近付き高速一文字斬り！

ブウン

おっ音鳴った

プシュウー

へえーこいつらの血って黒なんだ、どうでもいいけど。着地したら直ぐ様校庭に

転移

一言も話したくないねあいつらとは

俺は教師が嫌いだ

理由以上！

妖怪現わる

校庭に返り咲いた時さっきの明日菜似が他の二人に回復魔法を行っていた

すると俺が戻っていることに気付いたらしく魔法を中断し俺の元に駆け寄ってきた

そしてかなり予想外なことが起きた

「こらああああ!!!!!!」

何故か明日菜似がブチギレモードで殴りかかってきた

「ふごおっ!!」

突然のことだったので反応が遅れ、俺の頬にクリーンヒットし2メートルほど吹き飛んだ

「いや、おかしいだろ!!」

殴られた頬を摩りながら抗議した

「うっさい!! あんただんだけ来るのが遅いのよ!!」

言うときまだ腹の虫がおさまらないらしく今度は自分の刀で斬りかかってきた。多分俺が来るのが2年も遅れたのを怒ってるんじゃないだろうか、でもそれどっちかというと魔王が悪いんだよ!!

「うお!!! 危な!!! ちょっ!!! ほっ!!! はっ!!! はっはっは!!! 当たるか!!!」

体制を立て直し剣先から身を守るために避け続けていると、なんか面白くなってきて調子に乗った

「あああああ、もう堪忍袋の緒が切れたわあああ」

キレてる上にキレたおかげか攻撃手数が3倍になった（トランザム??）

しかし、避けて斬られてを繰り返しては話が出来ないので

「ほっ!!」

「何っ!!」

剣筋を見切り刃先を白刃取りをし、そして

「お花になれ」

剣自体をチューリップにしてやった

「へっ????」

何が起こったのか分らなかったらしい

「早く元に戻さない!!」

「貴女がうるさいから話が出来んのだよ、終わったら戻してやる」

「・・・わかったわ」

ぷっ、まだキレてんだけどチューリップを持ちながらだと微笑ましいね

「君が狭霧君かの？」

「あっ校長」

突然妖怪が現れた

「何！まだ魔物が残ってたのか！！」

戦闘態勢をしRPGー7を突きつけた

「いやいやいや！！わしは校長じゃ！！その物騒なものをしまつてくれ！！」

「嘘つけっ！お前のような後頭部がエイリアン並に長い奴がいるか！」

「フオッ！！酷いのお……」

まあ冗談だったのですぐにRPGー7はしまった

「で、何の用だ」

「うむ、実はお主に我が中学校で生徒n「断る」……やっぱりかの」

ふん当たり前だ、何故やっとな勉強という呪縛から解放されたのにま

た戻らなければならん、阿呆か

「しかしのお、これは魔王殿の命令なのじゃが」

（そうじゃ）

突然魔王から念話きた

「ちょっと待ってろじい、魔王と話す」

よく考えたら明日菜似是蚊帳の外だったな

「どういうことだサタン」

（実はの、ここ最近9～12時の夜間にしか出現しなかった魔物が朝、昼、夜、問わず出現するようになるのじゃ。まあ夜間にしか出現しなかったのはたまたまなんだろうが、だから頼む！！）

「はあ、あんたの頼みを断るわけにはいかんしな・・・」

（おっ、嬉しいことを言ってくれるの）

「美人の頼みをことわるわけないだろ」

（やはりこの姿に変化しといて正解だったの、では頼むぞ）

「ああ（変化してたのかよ！！！！）」

はあああああああ~~~~~

「おいじじい」

「ふお、終わったかの」

「かな~~~~~り遺憾に思うが入ってやるよ」

俺のスクールライフがスタートする!!! トホホ、

妖怪現わる（後書き）

茶々王出なかったですね．．．
どこいった？

俺の能力（前書き）

すいません今回短いです

俺の能力

今回の戦闘練習で俺の力

創造具現化には条件があることが分かった

？体の一部のどこかで触れたところじゃないと、具現化しない

？具体的でないと具現化しない（さりげなく地球破壊爆弾とか創造したけど駄目だった）つまり自分の中でイメージができるもの

？1つの創造物には5個までしか能力を付加できない（俺以外）

多分この3つだけだと思う。てか自分強化が半端ない、竜とかにもなれるし、移動強化をしたら光より速くなれるんだぜ、まあそのぶん皮膚とかかなり強化しないとバラバラになっちゃうけどな。茶々王についていえば、能力を付加したんじゃないかって、単純に付けただけだ

入学についてだが、俺が元中2だったということ中で中3から転校という形でスタートすることになった

「そういえば、おい疑似明日菜」

「誰が疑似明日菜よ、…でなによ」

ちなみに刹那似と普通な男子は魔力切れのせいか気絶している

「お前らの名前はなんだ？」

「わたしが時音で気絶している女の子が刹那で、男が健介よ。」

ほう、刹那はそのまま、時音は名前と違い大馬鹿なのか、結界師の奴とは大違いだな

「ちなみにわしは佐渡五衛門校長じゃ」

お前に聞いてねーよ

「勝手に名乗りあげるのは構わないがお前にたいする固有名詞は妖怪だぞ」

「∴酷いのお」

俺が酷いんじゃないかってお前の頭部形成が酷いんだよ

「∴あ、そういえば茶々王どこいったんだ」

完全に忘れてた

「「誰^{じゃ}？」」

いちいちハモるなよ

「俺が造った使い魔だ、裏庭の魔物を消すよう命令したままなんだけどな」

「使い魔って造れるですか？校長」

「…いや使い魔は高度魔術による召喚でしか喚べんのじゃが…でたらめじゃな」

「…あんた本当に魔法使い？」

「一応（吸血鬼だけだな）」

「一応って…」

「まあそういうのは、おいといて、茶々王に念話してみるわ」

時音から了承を得たので早速、ん？何？校長は？妖怪に人権がある
と？

ちなみに念話のやり方は、念話をしたい相手を思い浮かべてそれから話す。以上！

「おーい茶々〜何処いんだ〜」

（！マスターですか…）

ん？何か反応悪いな

「どうした？なんか変なもん見つけたか？」

ちなみに魔物に負けたなんて妄想は微塵も考えてない

（…ちよつと見ていたいただきたいことがあるので此処に来ていただきたい
てもよろしいですか）

ふむ

「分かったすぐ行く」

ということで地面に手をつけ、本日2回目
創造具現化

「どこでもドア」

青狸の道具を使うことにする

「「!!!!!!」」

まあそりゃあ驚くわな、目の前にいきなり21世紀の秘密道具らしき物体が出現したんだからな

「な、なにこれどこから出したの？」

「こ、これは本物かの？」

くっくくくっおもしれえ顔

「ああ本物だ、俺の力で出した、茶々が呼んでるから少し待ってろ」

二人に有無をいわせずさっさと茶々の元に向かった

小娘吸血鬼

ピンクなドアをくぐった先には、何故か銀髪の少女が驚いた顔でこちらを見ていた。

・・・おかしいな確か俺は茶々の元に行くようにしたんだがな

「人間！貴様今どうやって私の前に出現した！？」

なんかこの娘急にキレだした

「いや別に君に会うために来んじゃないんだけどね、それより君少し背の高いお姉さん知らない？」

どこで○ドアをポケットに回収しながら聞いた

「私の質問に答えろ！」

五月蠅い餓鬼だな

「爺の格好した青狸がクリスマスに俺の枕元に放置したままだったドアがワープドアだったから、自慢をするためにツレに会いに来ただけだ、お分かり？」

「・・・貴様は私に喧嘩を売ってるようだなならば買ってやろう、貴様を殺したあとのドアを頂く」

・・・殺す？

「あゝ君もしかして魔物？」

「私はそんな下位のものではない！ふっふっふ驚くなよ私は魔界最強種の吸血鬼であるぞおお！」

自分で言っ
て勝手にハイになりやがった

「へーそうなんだーすごいねー」

「じゃあなんで棒読みなんだ？」

「あっそうだった？ 悪い悪いやっぱりに自分に嘘ついて無理に言うのはよくないね〜、いや別に君が小ちゃいから馬鹿にしてるなんてことはないよ？」

「小さいだど!!!!!!!!!!!!!!」

やべ地雷踏んじまった

「八つ裂きにしてる!!」

怒号と共に両爪を30cm位伸ばし引っ掻いてきた

常人には不可視なほどの速さであつたが俺には余裕過ぎる速さである

「ほっ！」

「なに！」

まさか避けられるとは思ってなかったらしい、驚いた後今度は両爪

筋力強化のおかげで反動は皆無だ

「いやそれ反則だあああああ~~~~~!!!!!!」

ロリ吸血鬼が放った暗黒の雨は俺の攻撃により3秒で相殺し、今は魔法障壁で守っているようだがかなりきつそうだ

「今だ！行け！ピカチュウ！」

「はっ!？」

生きたままでも具現化出来るが色々嫌なのでメカピカチュウである

「コマンド！攻撃！10億ボルトオオオオオ!!!!!!」

「ぐうああああああああああああああああああ!!!!!!」

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

もちだが強化してまゝす

「残りライフ1だ！行け！マスターボール！」

ていん ていん ていーん ていていていていーん ていていーん♪

ロリ吸血鬼を捕まえた

「ゲット!!!!!! じゃなくて何やってんだ俺？」

ノリでやっちゃった・・・

「よっと、出てこいロリキュー」

「だ・・・誰が・・・ロリキュー・・・だ・・・」

満身創痍で出てきたロリキュー（ロリと吸血鬼の吸でロリキュー）

まずは回復させておくか・・・

「完全回復笛」

読んだ字の如し怪我でも何でも2秒で治る

パアーーーー

「元気かあ」

「貴様あゝ!!!!」

ロリキューはまた魔弾を俺に撃とうとしたが

プスプス・・・

「?何故だ!何故撃てない!」

「マスターボールに一度入ったら俺に攻撃出来んし俺の指示には絶対服従しなければならなくなるんだ」

「巫山戯るなあ!!!!」

今度は殴りかかってきたので

「お座り!!」

「のわぁ!」

無理矢理座らした

「さて、さっきの質問だが茶々は何処だ？」

「この宝石の中だ　ハッ!口が勝手に!」

「出せ」

「くそ!　開放」

出てきたのだが茶々だけじゃなく他6名いた

「何故茶々以外皆気絶してんだ？」

「私が殴って気絶させた、あの女は捕縛魔術で捕まえた」

「どうした茶々この程度の敵なら楽勝だろう」

「すみませんマスター、・・・彼女には原因不明のエラーのため攻撃出来ませんでした」

・・・おいおい本家の茶々丸は・・・そーいや吸血鬼の従者だったね
本家は・・・まさかそのプログラムがそのまま遺伝しちゃったのか・

「まあいいよこういうこともあるさ」

「すみません……」

どっちかっていうと俺が悪いしな

「おい！」

ロ
リ
キ
ユ
ー
か
・
・
・

「お前は俺の家に来い」

「分かったよ、じゃない！なんで私が貴様の家行かなきゃならん！」

「気分だ」

「貴様ああああ……！！！！！！」

「うそうそまあ俺はロリキューを殺したくないんでな」

「私の名ロリキューではない！！エル・K・ジュリアンだ！」

「そうか宜しくロリエル」

「違うはああああ！！！！」

また殴つてきた無駄なこと

「いっほっ！！！」

「な、殴れた!」

何故だ!! 攻撃できないはず・・・まさか!

「ツツコミはOKなのか!?!」

うそだろ! そんなコメディー紛いなことがあるはず無いだろう!!

「おい! もっとボケろ! 私がツツコミできんだろう!!」

「するか!?!」

・・・下手に弄らないほうがいいな 死ぬ

「もういい! 帰るぞ!?!」

さっさと帰ることにした俺であった

小娘吸血鬼（後書き）

「遅いのおく狭霧君は」

「・・・まさか帰ってないわよね、私の刀直してないのに・・・」

狭霧達が帰ったのを知ったのはこれから1時間後であった

句読点の位置に問題があればご報告お願いします

自己紹介（前書き）

学生の敵

期末考查が来てしまいました作者も勉強がだ~~~~~~~~

~~~~~い嫌いです

申し訳ありませんが1週間程次話投稿出来ません

糞が~~~~~！！

## 自己紹介

どうやらエルは原作のロリババアに少し似た環境の生い立ちだということが分かった

「私は元々王家の人間だったのだが、私が30歳の時に王家の禁宝薬を飲んでしまい始祖の吸血鬼になってしまったのだ」

・・・ツツコミどころがありすぎるぞこの話

「お前の「エルだ」エルの世界には人間がいるのか？」

「ああ、人間、獣人、竜人、魔物、がいるぞ、だが魔物の勢力が圧倒的で世界の半分は魔物が支配している」

・・魔王めあっちの世界には魔物がいるとしか言っていなかったじゃないか、てゆうかまさしくファンタジーの世界だな

「・・・お前今何歳だ」

「1000歳だが」

こいつもロリババアか！その容姿で良く10世紀も生きていったな

「まあな」

「心を読むな、あとなんで禁宝薬なんて飲んだんだよ、てゆうか普通封印された部屋とかに保管されてるんじゃないのか？」

そんな危険な薬がリビングとかに放置されているわけないしな

「リビングのテーブルに置いてあったから飲んだ」

「マジでかよ!!」

「・・・それからが大変だったな吸血衝動でメイドや両親を殺してしまい、城から逃げ出したのだがその時賞金首になってしまい、私の首目当ての人間やら獣人が襲ってきて逃げるのが大変だったな・・・」

「・・・そうか」

「しかし、私が追手から逃げ過労で倒れてしまった私を人間の老人に助けてもらい、その後護身の為に魔法を教えてもらったのだ」

「優しい老人だったんだな」

「ああ、あの人がいてくれなかったら吸血鬼だから死にはしないとはいえ酷い目にあっただろうな」

「まったく誰が禁宝薬なんてリビングのテーブルなんか置きっぱにしたらたんだんだよ!こんな可愛気な幼女を吸血鬼なんかにしやがって!」

「それでお前は今魔物の幹部とかになってんのか」

「そんな者にはならん!セルフに言われたからな」



「セルフ？」

「ああ老人の名だ、魔物は邪知暴虐で極悪非道だから絶対に関わるなどセルフが最期に言い残したんだ」

てことは死んだのか、セルフは・・なんとなく会いたかったんだがな

「じゃあなんで此の世界な来んだ？今まで魔物しか来てなかったのに」

「噂になっている、魔物が開発した平行世界へ行く魔法陣があると言うのが気になって城に忍び込んで発動してみたら此处に来てしまったのだ」

「それで突然襲いかかってきたあいつらを捕まえて、俺にボコボコにされて俺の家に来たと」

「好きで来たのではないわ！それより貴様は何者だ、あの魔力あの兵器、あんな反則じみた貴様はなんだ」

「俺の名前は坂上狭霧だ元は人間だったんだが魔王のある命令のせいで今は吸血鬼だ」

「狭霧も吸血鬼なのか！！」

「ああ、成り立てだがな」

「魔王というのは何者だ？私が飲んだ禁宝薬を持っていたのか？」

「知らん起きたらなってたからな」

「あの力もか？」

「魔力無限と創造具現化というのを貰った」

「………化物か」

「人間のつもりだ」

確かに人外だが心は人間だ！！

「……もうこれくらいで自己紹介はいいだろう早く私の部屋の内装をしろ」

くっくくく自信喪失でもしてんだろう

「そうだな」

リビングのソファから立ちエルの部屋に向かった

## 自己紹介（後書き）

感想宜しくお願いします

**余談にもならん余談です（前書き）**

どうでもいいんで別に見ないでもいいですよ〜

## 余談にもならん余談です

作者「終わった・・・終わった終わった終わった終わったオワタオワタオワタオワタ・・・終わったWWWWW~~~~~」

狭霧「うるせえ!!!!!!」

作者「終わった~~~~~!!!!!!」

狭霧「おい茶々あいつちよつとぶん殴って黙らしてこい」

茶々王「了解ですマスター」

作者「おわも「お黙り下さい」ぐぼ!!!!!!おおおおおおお  
おおおお・・・」      キラ☆

茶々王の怒りの鉄拳により、ばいき○まんもびっくりなほど空高く飛んで行き輝く星となった

狭霧「■■■■・・・?!■■■■!!!!!!」

茶々王「■■■■・・・」

作者不在のため言語が表せませ〜ん

狭霧「■■■■、ったくめんどくせえ奴だなあ〜」

話が出来るので作者を連れ戻した

作者「だ・・だったら・・・大気圏外まで・・・ぶっとばすなよ  
!!」

茶々王「なら次は銀河系外まで逝きましようか？」

作者「すみませんすみません字が違うなんて言いません  
から許してください!!」

作者は秘技土下座を使った!

狭霧「許してやれ茶々、俺達が読者の皆様に話せなくなるだろ、俺  
達が」

茶々王「・・・そうですね、こんないかれたラジオのせいで読者の  
皆様に迷惑をかけるわけにはいきません。

いかれたラジオ様、ちゃんと仕事をしてください、私達の  
為に」

元作者「ハッ、善処する所存であります!!（・・・扱いヒドッ!  
!しかも初登場なのに俺の固有名詞が変えられちゃっ  
タよ、  
シクシク・・・）」

狭霧「（なんか茶々の性格変わってないか?・・・気のせいだな、  
ウン、気のせいだ）そ、それで何が終わったって?」

いかれたラジオ「っておい!なんか違うぞ!」

茶々王「なんなんですか貴方は、マスターの質問よりもそんなどうでもいいことにツツコミを入れるんですか？・・・もうその口 要りませんね」

茶々王が関節からブレードを出し、いかれたラジオに突きつけた

いかれたラジオ「エットデスネ、ワタクシノガッキマツテストガシユウリヨウシタノデゴザイマス（（（；。D。）（（（）」

狭霧「あゝテストかゝほんとウザイよなゝ（・・・やべゝなんかマジで性格が強暴化してるぞ・・・）」

茶々王「マスター？今なにか失礼なことを考えませんでしたか？」

狭霧「いえいえいえいえいえいえいえいえいえいえいえいえい何もう考えていません。」

茶々王「そうですか、ならいいです。」

なんとか生きながらえた・・・

作者「あっ！もうこんな時間だ！もお終わらなければ！それではさよなら！」

作者が走って逃げた

茶々王「逃すか・・・ターゲットロックオン・・・ファイア」

ピューーーーーーんどっかーーーーーん！！！！！！

作者「ごばああああああああ！！！！！！！！！！」

．．．．．茶々に対する言動は気をつけようと心に刻み込んだ瞬間であつた



余談にもならん余談です（後書き）

エル「私は!!」

## 地獄の始まり（前書き）

なんか最近投稿ペースが遅れてすみません・・・

# 地獄の始まり

「嘘だろ嘘だろ嘘だろ嘘だろ……おいおいおいおいおいおい、おい……！！！！！！！！」

今俺は本気と書いてマジでパニックッテいる

「巫山戲んなよマジかよ、有り得んよ!!、ぐあゝゝゝ!!!!!!」マジかマジかマジかマジかマジかマジかああああああ!!!!!!!!」

今俺が絶賛パニくり中の場所は、狭霧印の部屋の中にあるちよつと変わった異空間内です

何故ここまで彼女欲しさに手当たり次第にナンパしまくり、そしてことごとくビンタの仕打ちで失敗している馬鹿男が今回はと駅前でナンパしたところ

「ハッ？何やってんの？兄貴」

とまあまさかの妹でどうごまかそうかと汗だくだくで考えている状況のようにやばいのかというと

「こん中で　４６億年も生きなきゃならんのかあああ！！！！！！！！！！」

・・・何故地球年齢と同じほどの長寿記録に挑戦しようとしてるかというところ

こんなことがあつたからである

## 狭霧 side

エルの部屋をエリザベス女王が泡を吹いてブツ倒れそうなほど滅茶苦茶豪華な西洋風な部屋に仕立てやった後（超大変だった）腹が減ったんで世界最強のアシスタントにジョブチェンジし、茶々王のアシスタントしていた（食料、調理器具、調味料、等々作りまくった）。やはり茶々王の料理はメガ美味く、リアルにほぺったを落とし、旨い！！！！と絶叫したんだが

「怖いわ！！！！」

エルにツツコミと言う名の鉄拳をくらった

「うう痛えゝゝ・・・・・・・・」

今俺は頬を摩りながらマイルームのベッドでゴロゴロしながら呟いた  
しかしこの痛みはエルのツツコミによるものではない

「茶々王の性格なんか変わってないか・・・」

茶々王に殴られたものであった

先程の頬つぺた落としを茶々王に見せたところ

「キモいですマスター」

と言われ、そのうえ無表情で殴られたのだ

皆さん（読者）も知っているように茶々王の肉体能力はチートでありスーパーサ○ヤ人も（；。D。）！な力なのだ

そんな力で殴られてみる、俺の顔の半分が吹き飛んだぜ。まあすぐ再生したんだが何故か痛みが残ったのだ……何故だ？

「うう……あの愛らしい癒されキャラだったのに何故だ！？……  
そういやエルが来てからなんかおかしかったな、あのロリババアの  
せいかなぁ……！！」

自分でも気付かなかったかこの時狭霧は殺気を出しており何故か察知してしまったエルがビクビクしていたのは余談である

「まあ多分原因は茶々丸の性格やら思考パターンをコピーしちゃったからエルの容姿やら吸血鬼やら性格やらが酷似してっからパニック  
ってショートして何故かしらんが性格が変わっちまいやがったのか、  
つか何故性格？神は無慈悲だ！！！」

そしてゴロゴロしてたんだが

「く……ZZZZZZそ……ZZZZZZ何で……ZZZZZ」

まあ今日色々有りましたからね爆睡しました

も知らずに

この睡眠により地獄が始まると

「知らない天井だ」

目覚めの一言をこんな風にまあよくあること言ったんだがそれはいい

「いや待てここどこだ」

転生物語の始まりなわけ有り得んしどういふこった？今俺は真っ白な天井に真っ白なベットに仰向けに寝ていた

「それはの」

「おわあ！」

立ち上がろうとしたとき突然魔王が現れた

「驚き過ぎじゃ」

「いやいや急に目の前に出てきちゃ普通驚くわ、そんなことより此処はどこだ」

「うむ、此処は我が創った空間じゃ」

「へえ〜で何の用？」

「修業しろ」

・・・・・・？？？？

「ハッ？何で？」

いや俺十分チートだよ？いらんよ修業なんて

「その慢心が駄目なんじゃ」

「心読まんという、いやでもそうじゃんしかも不死だし、無敵だよ？」

いやいや自意識過剰じゃなくてマジで

「まあお主の意見聞かんの」

「聞けよ！！」

「我が戦闘分野、魔法分野、料理分野、スポーツ分野の使徒つくつ  
といたから其奴等に習うのじゃ」

「戦闘と魔法は分かるけど何で料理とスポーツの分野があんだよ、  
関係無いだろ」

「気分じゃ」

「いやいや料理とか俺やらんし無駄だし」

「まあひとつずつやると時間がかかる、分身してから習うのじゃぞ」



「聞けよ!!」

「文句以外の質問はあるかの？」

「はぁゝ（何でこんな奴が神なんだ？）、此処にはちよこちよこ来ればいいのか？」

「いや一括で覚えてもらう」

「どんぐらいかかんの？」

「46億年位かの」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・はっ？今なんつった

「すまん耳イカれたらしい、もう一回言ってくれ」

「46億年位じゃ」

「馬鹿か!!!!!!!!!!!!!!何いてんだよ!!!!!!!!!!46億年とか地球さんと同じ年齢だよ？それ？億ってなんだよ!!!!!!!!!!」

「大丈夫だ、帰ったときは一日しか経ってないからの」

「短か!! いやそれはいいから長過ぎなんだよ!!」

「まあ一応茶々王とエルには言っとくから大丈夫じゃぞ」

「人の言うこと聞けや!!!!!!」

「そんじゃ頑張っての」

「お~~~~~~~~い!!!!!!」

魔王が消えて次いで四人の女性（絶世の美女）が現れた

「「「くっくくく宜しくな」」」

そして俺は直感で察知した

うことを

此奴らはドSであるとい

## 地獄の始まり（後書き）

本当に感想お願いします!!

暇潰し譲渡（前書き）

ちよつと、いやかなり短いです．．．．．  
m  
┌  
└  
m

## 暇潰し讓渡

エル side

ふっふっふ素晴らしい！！

まさに私に相応しい部屋だ！

「これは狭霧に礼をしなければな・・・茶々王、彼奴が喜びそうなことって知ってるか？」

「そうですね・・・キスをすれば喜ぶと思います」

「キ、キス！・・・まあ狭霧ならいいか／＼／」

幼女からのキスなどそっち系の趣味がない人には全くいらんことをしようとするエルであった

「ん、今私を誰かが馬鹿にした気がする」

「気のせいでしょう」

「だよな」

すると突然

「こんにちは、エルさん茶々王」

「誰d「こんにちは魔王様」ま、魔王!？」

「はい、早速用件ですが狭霧殿は修業の為に一日程帰って来ませんのでそれを伝えにきました」

「修業？あいつにそんなのいるのか？」

「いじm、もしもの為です」

「わ、わかった（今、いじめといふとしたよな）」

「それでは」

そのまま魔王は消えていった

「あれが魔王か・・・ちょっと変わっているな・・・」

「おっとそうでした」

「おわっ！」

また魔王が現れた

「暇潰しにこれを渡しておきますね」

魔王はエルにモンスターハンターポータブル3rdとPSPを3つずつ渡した

「何だこれは？」

「これはゲームというものでこちらの世界での娯楽です。やり方等

は茶々王に聞いて下さい、では」

そしてまた魔王は消えた

「（なんか帰るのが早いな魔王）それでは早速この「ゲーム」について教えてくれ茶々王」

「了解ですエル様」

狭霧についてはどうでもいい二人であった



## 暇潰し譲渡（後書き）

感想マジでお願いします!!

## 主人公設定（前書き）

今頃ですが

## 主人公設定

名前 坂上狹霧

容姿 黒髪黒目の典型的な日本人

しかし美女である神流と双子のおかげか美男子である

性格 基本めんどくさがり屋 敵には極悪非道だが味方は生命をかけて守る（死なないが）

ステータス

魔力…無限

気… $B \Rightarrow EX +$

耐久力… $C \Rightarrow EX +$ （無限）

筋力… $B \Rightarrow EX +$ （無限）

俊敏… $B \Rightarrow EX +$ （無限）

運… $E \Rightarrow \neg S$

魔力は勿論無限

気は元は常人と同じだが修業（地獄）により人の域を圧倒的に超えた  
耐久力、筋力、俊敏は修業（地獄）により能力使用無しでも常人の  
100億倍になった

元々悪かった運が魔王から能力譲渡時にさらに悪くなった

魔法

魔法の系統は火、水、土、雷、風、光、闇がある

因みに狭霧は修業（地獄）により全系統が使える、お気に入り火、  
雷、闇である

しかし狭霧は具現化した兵器に魔法を併用するためあまり魔法は使  
わない

能力

## 創造具現化

資材不要のチート能力、創造するだけで具現化出来る

### 条件

？体の一部のどこかで触れたところじゃないと、具現化しない

(例) 手で触れ

たところから

？具体的にないと具現化しない、つまり自分の中でイメージができるもの

(例) 地球を創

造しても具体的にないと具現化できない

？1つの創造物には5個までしか能力を付加できない(狭霧自身以外)

(例) そのまま

です

？狭霧以外の生物には直接は具現化出来ない

(例) 相手にこの世から消えろと創

造しても無駄

しかし修業により？の条件は魔法との併用により何処にでも具現化出来るようになった

この能力で狭霧自身を創造具現化が可能で身体年齢、性転換も可能である

しかも竜やガンダムにもなれる

元からある物体も触れていれば自由に換えられる

全能の眼

発動中瞳が黄金色になる

見たいと望んだものが見える

注意！主人公は常識をわきまえています

（狭霧の）世界中の言語、歴史、建物の知識コンプリート

あんま意味はない

お気に入り兵器

完斬刀

形は日本刀

刃先が電子よりも鋭いので名前どおり完全に斬ることが出来る刀である、いわゆる斬れない物は無い刀である

追加能力

- ・相手お魔法を「喰う」ことが出来る
- ・「喰った」魔法をそのまま吐き出すことが可能
- ・自分の魔力で魔力に比例した斬撃が出せる
- ・刀身を無色透明にする
- ・霊体等の「斬れないもの」を斬る

超電磁砲  
レールガン

全長10メートルもある大型砲

貫通弾を発射する

## 追加能力

- ・弾を魔弾、合金球、核弾、回復弾に装填可能
- ・魔弾・弾の周囲に衝撃波を纏わせて広範囲攻撃が可能、連射可能
- ・合金弾・敵を貫くことを目的とする、射程はこの中で一番長い、単発式
- ・核弾・半径50キロ圏内を爆破する、爆破範囲と放射線の有無は設定可能、連射可能
- ・回復弾・直撃した奴の怪我を全快させる

## 紫電砲

### 遠隔操作兵器

超高速で空間を移動し魔弾ブラストを発射  
(所謂ファンネルです)

## 追加能力

- ・無色透明化可能
- ・破壊された場合破片がミニ紫電砲になる



- ・ミニ紫電砲の威力は紫電砲と同じ威力になる

- ・ライトセイバーモード、銃口からライトセイバーを突出させる

- ・ライトセイバーモード時に移動速度が通常の3倍になる

ハリセン

ボケにはツツコミを敵には雷を落とす武器兼漫才道具である

追加能力

- ・ツツコミ役がこのハリセンでボケにツツコムと通常の10倍の叩いた音がする

- ・ツツコミ役がこのハリセンで敵に攻撃すると通常の20倍の威力が出る

- ・ツツコミ役がこのハリセンで敵を叩くと存在自体をツツコミ、敵を消滅させる

- ・ツツコミ役がこのハリセンで味方を叩くと精神を安定させることが出来る

- ・敵を複数ロックオン可能

簡易装備

快適の服

自分の周りの気温や湿度を自由に変えることが出来る

## 主人公設定（後書き）

本当は他のことも説明するつもりでしたが．．．  
m  
┌  
└  
m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5012q/>

---

魔王の力で「この」世界を守れえええ??

2011年10月8日16時57分発行